



## 第59回書玄展・第9回公募書玄展 テーマ「白川静・文字のちから」

と き: 令和5年8月29日(火)～9月3日(日)

ところ: 愛知県芸術文化センター8階J室

今回は「白川静・文字のちから」という大きなテーマでした。日ごろ、書の作品を創作するため素材とする言葉や文章には注目しても、その文字本来の意味について深く考察することはあまり多くありません。出品者一七二名、漢字はもとより白川静の言葉を素材とし、それぞれの表現を模索する大変有意義な制作時間でありました。

白川静は、立命館大学文学部教授として、文字の研究に取り組み、『字統』『字訓』『字通』等の研究により、文化勲章を授与されました。

「口」が「くち」ではなく、神様への祈りの祝詞を入れる器であることを指摘し、「口」の字形を含む文字を新しく体系化したことが、最大の成果と言われています。

加藤裕会長が篆書の大字と小字でリズムカルに書かれた「論語」を会場の中央に展示し、左右へと役員が作品が広がっていきます。

平野芳碩副会長は、躍動感ある「舞」の文字を、その元々の形の意味をしたため作品に仕上げました。

後藤啓太事務局長は、俳人野沢節子が花の蕊をみて文字を連想した感動を詠んだ俳句「壽の字は紅梅の蕊のさま」を書きました。



会員と公募の小額作品一三〇点は、福・寿・遊・星・楽などたくさんの甲骨文・金文が並びました。たとえ同じ漢字が書かれていても、書き手の違いにより表現の違いが大きくあり、活字ではない筆文字の風情や味わいが感じられました。

J室のアーチ型の壁面を生かし、小額作品の中に、加藤会長の「龍」「鳳」の作品を絶妙のバランスで配置した陳列の美しさも、御来場の皆様に好評でした。

遠方より、またご多用のなか御来場いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。